

日

本の精神医学の草創期は大正時代である。

この時代に、後に森田療法として知られることになる独自の療法を編み出し、神経症者の救済に顕著な実績をあげた在野の臨床医が森田正馬である。日本の近代医学はドイツ医学の圧倒的に強い影響下で開始され、これを主導したのは帝国大学医学部であった。森田療法は日本人の伝統的な思考様式に深く馴染んだ療法である。しかしそれがゆえに、臨床の現場でいかに高い成果をあげても、帝国大学主導の医学界でこの在野の臨床医が権威を与えられることはついぞなかった。

今日でもなおそうである。森田療法は「生活の発見会」という自助的な全国組織に受け継がれ、新しい在野のネットワークとして広がりをもせている。森田療法とは、帰するところ人間の「心のおきどころ」に焦点を当てた療法であるから、医学界や病院ではなく、この療法に共鳴する人たちの自助組織の中で生きつづけるというの、一つの必然的な在り方なのかも知れない。

森田の療法思想を継承した高良武久や大原健士郎などによって『森田正馬全集』（白揚社）全七

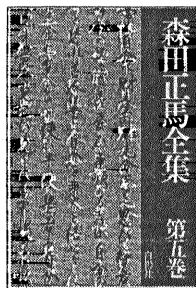
古典再読

森田正馬

『森田正馬全集』第五卷

文 渡辺利夫 (拓殖大学学長)

白揚社 一九七四年刊



巻が編まれたことは画期的であった。日本の精神医学の再生のためばかりではない。日本人が幸福に生きるための心の在処を指し示す思想として、森田思想が再評価される日がくることを私は念じている。この長寿社会の中で日本人はどのように死を迎えるのだろうか。現代は「死生観の時代」なのである。

森

田はこう説く。死はこれを思想でいかにやりくりしようとする恐怖である。死の恐怖は「人間感情の本来」だからである。この本来を認めるならば死の恐怖はそのまま恐怖である。恐怖に身をまかせていけば、変転きわまりない外界の変化に応じてとどまることを知らず流転する精神活動の中で、恐怖はいつの間にか消え去り、神経症に発展することはない。理知で自分を支配するのではなく、生命の自然発動にしたがって生きよ。森田療法思想の核心が「あるがまま」である。これを症者に体得させるための森田と症者の対話集が、本全集の第五巻である。私はことあることにこの人生の「手引き書」の頁のそこそこを開き、得心して床に就く。